

1. ガイダンス—歴史学からの自立を志向する歴史教育

2025.10. 3. 大橋 幸泰

はじめに

歴史学が不変でないように、歴史教科書・歴史教育も不変ではない

* 本日は、開講するにあたって、高校新課程の歴史教科書・歴史教育をめぐる議論の現状を紹介／新課程に内在する問題点を指摘した上で、本講義を通じて考えたいことを提示

1. 変わる歴史教科書

(1) 日本史探究—第一学習社版の近世を事例に

- a. 仁政という政治常識／近世秩序の中核となる仁政イデオロギーへの注視
- b. 移行期の抽出／時代区分の断絶を否定、発展段階論への疑義／中近世移行期論への注視
- c. マイノリティから見る歴史／アイヌ・琉球の人びとへの注視
- d. 近世宗教論／近世社会における多様な宗教活動と、近世における治者による規律化

(2) 歴史総合

- a. 18 世紀以降の近現代史／世界中の諸地域・諸国家が緊密に結びつく時代
- b. 日本史と外国史とを分断しない／日本史・東洋史・西洋史の枠組みへの疑義
- c. 国民国家とそれを取り巻く矛盾の考察

* 歴史教科書の執筆者／基本は歴史研究者

→ 歴史学の成果をできるだけ反映させようとしている

2. 変わる歴史教育

歴史学の成果を歴史教育に反映させること自体は当然／しかし、長い間の研究の展開にしたがって、新たな用語が蓄積されていった結果、膨大な暗記量を強いられる歴史学習が常態に

→ 知識詰め込み型歴史学習からの脱却を志向／教員から一方的に教えられるのではなく、自ら探究活動

→ 教科書には、多くの問とその議論のための史資料を豊富に掲載／あるいは生徒自身が問を立て、それに答えるための史資料を図書館などで調べることが期待されている

* 「問を立てる」ということ／その課題を解決するために史資料を調査／いずれも歴史研究の基本

→ 歴史学の方法を高校生にも実践させる試み／問の立て方とともに史資料の探し方が重要／ただし、どのような視座に立つかによって、史資料も答も可変的／たとえば、大日本帝国憲法成立の意義

3. 歴史教育の独自性とは何か

歴史総合と日本史探究・世界史探究／高校生自らが考える授業の提唱

→ ただし、新課程で初めて提起されたのではない／すでに戦後直後から提起があり、21 世紀の現在まで、多くの授業実践が歴史教育者協会の機関誌『歴史地理教育』などで紹介されてきた

* 歴史教育の相対的独自性をめぐる代表的議論／1980年代の安井・土井論争

中学1年生を対象とした、古代ローマ時代、スパルタクスの蜂起を扱った授業実践(安井俊夫)

→ 討論授業／「アルプスを越えて故郷へ(行くべきか)」、「今こそローマ攻撃(をするべきか)」との問

→ 史実の点から、「なぜ奴隷たちはローマ進撃を目指さなかったのか」と問うべきだったとの批判(土井正興)

→ 歴史教育は、歴史学の成果に忠実でなければいけないか？

おわりに

「問を立てる」／そもそも、問の立て方そのものに問題がある場合もある

* たとえば、「日本人はなぜ無宗教なのか」という問／調べていくうちに、「日本人」・「宗教」の内容が、現代の常識に規定されていることに気づけば、深い学びになる／しかし、これらのキーワードが前近代も含めて超歴史的に不変であると誤解したままでは、かえって誤った歴史認識を再生産

講義を通じて考えたいこと

a. 歴史学と歴史教育のあるべき関係とは、どのような関係か

b. 歴史を考える上で、望ましい問とは、どのような問か

【参考文献】

歴史学研究会編『歴史学と歴史教育のあいだ』（三省堂、1993年）

石山久夫・渡辺賢二編『展望日本歴史2 歴史教育の現在』（東京堂出版、2000年）

小川幸司『シリーズ歴史総合を学ぶ③ 世界史とは何か―「歴史実践」のために』（岩波書店、2023年）

小川幸司「動き始めた歴史教育改革の成果と課題」（『歴史評論』890、2024年）

【付記】

・明日までに、Waseda Moodleにて講義記録の提出を求める。